

「金持ちとラザロ」

2015年10月16日

ルカによる福音書 16章 19節～25節。「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。』」

主イエスは「金持ちとラザロ」の譬え話をされた。ある金持ちがいた。彼は裕福な人々が愛用する貝の成分から抽出される染料で染めた紫色の衣や、エジプト産の柔らかい高価な亜麻布の下着を着、毎日贅沢に遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロという貧しい人が横たわっていた。彼は金持ちの食卓から落ちる食べ物で腹を満たしたいと思うほど飢えていた、体は栄養失調によって体にできものができて、犬が来て、それを舐めていた。貧しいラザロは死んだが、天使に伴われ、天の宴席にいるアブラハムの傍に連れて行かれた。アブラハムなどの族長は天の宴席に迎えられていると信じられていた。ラザロは、この光栄ある場に迎えられた訳である。金持ちも死んで葬られたが、陰府（黄泉）の苦しみにさいなまれる所に送られた。当時、世界は天と地と黄泉の三層に分かれていると考えられていた。黄泉は死者の集まる所で、元来は、暗黒で静寂な死の世界であったが、金持ちが送られた所は、永遠の炎で焼かれる地獄であった。彼が目を見て見ると、天の宴席でアブラハムとその傍にラザロがいるのがはるかかなたに見えた。そこで、大声で「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます」と叫んだ。彼は、自分は信仰の父アブラハムの子である、神の民イスラエル人と思っていたのである。ところが、アブラハムは「子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ」と拒絶の返答をした。

ラザロはただ貧しかっただけで、信仰深い人だとは書かれていない。その彼は天の宴席に迎えられた。一方、アブラハムの子であるという既得権に安住していた金持ちはラザロの指先の水で舌を冷やしたいと思うほどの、炎熱にもだえる地獄に送られた。この峻別はどこから来るのか。

主イエスの意図はただ一つであろう。金持ちは自分の豊かさを満喫し、隣人に対しては目を閉ざした。門前にいる貧しいラザロが全く目に入らなかった。無関心の罪が裁かれると語ったのである。ある牧師の「地獄はありますよ、しかし、そこにはだれもいません」という言葉が好きである。その私も無関心の罪に埋没している。（続く）